偉大なる魔女の訃報が世界を駆け巡り一か月が経った。

「カーラ・ウィンストンと言えば大陸に知らぬ者とてない大戦の英雄ですよね」

「世間では伝説的な魔女ということになっていますわね。私にとっては手のかかる患者、厄介な愁訴老人でしたけど」

さんざん手こずらされました、と嘘かまことかおっとり微笑むのは、青と白を基調にした清潔そうなエプロンドレスの婦長だ。

年齢は七十前後だろうか、若き日の美貌の名残りを留めた顔には長年看護婦として務め上げた矜持が浮かび、歩き方はきびきびとして微塵も衰えを感じさせない。

「ああ、訂正します。問題児に年齢は関係ございません、カーラ・ウィンストンが厄介だったのは偏に彼女がカーラ・ウィンストンだったからに尽きます。彼女の本質が問題児なんですよ、あれほど手のかかる人は私の看護婦人生において初めてでした」

「は、はあ」

謎めいた発言が要領得ず首を傾げるのは、ストロボ式カメラを抱え、こじゃれたキャスケット帽を被った青年だ。

彼が当惑している原因は、元担当患者をこてんぱんにこきおろす婦長の舌鋒のみにあらず、婦長が酷評しているのが他でもない「あの」カーラ・ウィンストンだからだ。

上品な白髪をひっ詰め髪にし、愛情深く潤んだ瞳をした婦長は、皺ばんだ頬を綻ばせて窓の外を仰ぐ。

綺麗に刈り込まれた芝生の中心には虹の光沢帯びた噴水があり、その周囲ではいずれも看護婦に付き添われた老人たちが三々五々憩っている。

記者はしばしば廊下の半ばでフラッシュを焚き、どこもかしこも古い木材が飴色に磨き込まれた、養老院の内観を物珍しげに撮影している。

「そんなに珍しいかしら」

「ええ……なんといっても大陸でも激レアな魔女専門の養老院、あそこにいるのもここにいるのも、いま看護婦さんに付き添われて部屋に帰ってくのも魔女なんですよね」

魔女が恐怖の代名詞だった暗黒時代はとうに過ぎた。

文明開化をむかえた大陸では、魔女の存在自体が絶滅危惧種である。

多くは魔女狩りで狩られ、戦争の兵器として使い捨てられ、

血筋は絶えて久しい。

好奇心のかたまりとなった記者が指さす先、窓ガラスを隔てた中庭の芝生は刈りこまれ、ベンチでは老いた老女が日なたぼっこしている。

看護婦が押す車椅子には恍惚とした老女が座り、虚空の一点を薄ぼんやりと凝視していた。

「記者さん位のお年だと生きている魔女に会うこと自体まれでしょうね」

「ですので今日の取材は楽しみにしていました。叶うなら生前のカーラ・ウィンストンにお会いしたかったんですがガードが厳しくて……葬儀が恙無く済んだ今、漸く関係者の話を聞く許しが出たんです」

「カーラ・ウィンストンの何を知りたいのですが。武勇伝や英雄譚、面白おかしく脚色されたミュージカルや物語、眉唾な噂は巷にあふれておりますでしょうに」

婦長に質問された若き記者は高揚に駆られ、初々しく上気した頬で告げる。

「僕が知りたいのはカーラ・ウィンストンの知られざる晩年です。地上最強の魔女、大戦の英雄と称えられた彼女が、第一線を退いたその後の人生です」

「ご隠居の余生が知りたいなんて変わってらっしゃるわね」小さく頷くも、そう評す口調に嫌味はない。

率直な感想を述べたのみ、という素朴さが伝わってくる。むしろ青臭い情熱にあふれた記者の提案を面白がっている節さえあった。

記者は光沢ある万年筆を掲げ、さらに熱を入れて補足する。

「カーラ・ウィンストンの最盛期をしるした書籍は既に何十冊と出版され、どれも空前のベストセラーを記録しています。でもですね、彼女の晩年を掘り下げた書籍は一冊もないんですよ？　生き馬の目を抜く業界で人のまねしてたって頭打ちだ、まだ誰も挑戦してない領域こそ無限の可能性を秘めている。最強の魔女として世界中を震え上がらせ、大戦を終結に導いたカーラ・ウィンストンの晩年の真実、気になりませんか？」

カーラ・ウィンストン。

その名は大陸中の人々の記憶に焼き付いている。

婦長は記者を西の角部屋に案内する。

「ここがカーラが使っていた部屋です」
「何もありませんね」
「彼女の希望で遺品は全部慈善団体に寄付されました」
「もったいない……オークションにかけたら法外な値で落札されたろうに、おっと」
失言を自覚して口を噤む。
生前のカーラの部屋は、他の部屋と大差ない広さだった。壁紙は目に優しいクリーム色で、束ねたドライフラワーの模様が描かれている。
ベッドの横の白い円卓には、優美な曲線を描く白衣の水差しがのっかっていた。
「彼女が来た日の事はよく覚えています」
婦長はシーツが綺麗に整えられたベッドに手をおき、穏やかに話し始める。

「ここが私の部屋？　カヤネズミの巣みたい」
自分の部屋に導かれたカーラ・ウィンストンは開口一番不満をもらし、婦長のジル・カステルを睨み付ける。
「この養老院で一番いい部屋は？」
「ありません。広さと造りは全部同じです。せいぜい日の光を取り入れる窓の位置が異なる程度です」
「なにそれ、せっかく高いおカネを払って入園したのに詐欺じゃない」
車椅子にかけたカーラが憮然と腕を組む。
魔女が晩年を過ごす養老院にあって、せいぜい十代半ばの華奢な少女にしか見えない彼女の容姿は異彩を放っていた。ジルは温和な笑みを浮かべ、わがままな入居者に教え諭す。
「ここは国営です。いくら多額の寄付をいただいても、それを基準に特別扱いはしませんわ。当園に来たからにはルールに慣れていただかないと」
「よく言うわ、ただの姥捨て小屋じゃない」
燐の炎のような緑の目に嫌悪が滾る。
「さんざん私たちをこき使っといて、絶滅寸前になったら突然人道に目覚めて、おままごとの延長の姥捨ての園を用意するなんて。国って勝手なもんね」
「そして私がこの姥捨ての園の婦長です」
「さしずめ白衣の魔女ってトコね」
蓮っ葉な口調で皮肉り、車椅子の車輪を器用に回して部屋中を検める。
部屋の壁に沿って車椅子を動かしていたカーラが、眦を吊り上げて唐突に顔を上げる。
「何よ、じろじろ。この姿が珍しい？」

「ええ……いえ。それも勿論ありますけれど、お話にうかがってたより随分元気そうなので驚きました」
「ふん。中身はボロボロよ」
車椅子のカーラが胸を張る。
いばることではない。
「あの噂は本当なんですね……」
「むかあしむかあし大魔女カーラ・ウィンストンは兵器として駆り出された戦場で不老の呪いをかけられ、以降ちっとも老いなくなりました。死ぬまで若く儚く美しい少女のまま、皆からバケモノ扱いされて孤独に老いていく運命を背負わされてしまったのです。ああ、なんていう悲劇！」
澄んだ声音で囀るカーラの姿は、必要以上に悪ぶっているようにも、または自分に酔っているようにも見えて滑稽だ。
大仰な手振りで宣言し、挑戦的な腕組みで婦長を睨む。
「ご満足いただけて？　無償にしては面白い見世物でしょ、なんならもっと近くによって見てもいいのよ、お肌の張りと潤いは十代の頃まんまなんだから」
「お言葉に甘えて」
「えっ」
まさか乗って来るとは思わなかったカーラが車輪を掴んで引くが、構わず歩み寄って覗き込む。
「本当、毛穴が見当たらない位綺麗な肌ですわね」